

二八
凡そ人を讒譖するほどの奴はみな利口者だ。随て手段方法甚だ巧みである。だから往々にして人々の心に入り易い。そこでこの事は古から心ある者の歎の種となつて居る。實際奸悪な奴が善類を陥入れ國に災したことは甚だ夥しい。義貞ほどの精忠の臣も、奸雄尊氏の讒に逢ひて苦難を重ね、國家もまた如何に災害を蒙つたか知れない。然し義貞はたゞ忠義の觀念以外に何も無く一族郎黨の精かぎり根かぎりを傾け盡して、一同悉く斃れ、あたり一めん屍を堆くした。然し假令死すとも天は炳乎として誠を照らして居るのだ。後世義貞を敬ぶ者はあつても尊氏を敬ぶ者は一人も居ない。皆がみな尊氏を憎み徹して居るのだ。

贈高山彦九郎

頼 春 水

曾識帶經耕且耨
新田逃跡惜三餘
秋霜春雨時攀樹
月下花陰或侍輿

高山彦九郎に贈る

頼 春 水

曾て識る經を帯びて耕し且つ耨くを
新田に跡を逃れて三餘を惜しむ
秋霜春雨時に樹を攀ち
月下花陰或は輿に侍す

幾處雲巖尋二傑士

連年華洛拜二皇居

相逢杯酒宜論志

大丈夫何必讀書

幾處か雲巖傑士を尋ね

連年華洛皇居を拜す

相逢うて杯酒宜しく志を論ずべし

大丈夫何そ必ずしも書を讀まむ

【帶經】經書を携へる。

【惜三餘】冬と雨降る日と夜とを三餘といひ古人はこの餘りを利用して書を讀んだ。之を三餘を惜しむといふのだがその後時間を惜んで學問するに用ゐる。

【秋霜春雨】之れは文の修辭上の文字で字のみを直譯せず、いつもと思へばよい、攀樹も何も木上りではない、樹のある處、即ち山などと思へばよい。

【月下花陰】前の秋霜春雨に對して考へるとよく分ると思ふが、これも親に仕へるのに月下花陰のみと限らない筈だ、これも修辭上のことで欠張りいつもの意味だ。

【雲巖】これも雲や巖とは違ふ、雲を分け巖を踏んでの意味だから諸處といふ譯だ。京都

解 釋

私わたしはかねてから高山彦九郎たかみやまひこくわといふ人物はよく知つて居る。上州新田じやうしゆしんたの細谷ほそやといふところで寸陰すんいんを惜おぼしんで讀書どくしよしたこと、剣けんで鋤鉞すくわを把とる間も經書きやうしよを放はなさなかつたのも、折せあらば山野さんやを跋涉たつしやして英氣えいきを養やしなつたことも、孝心せうしん深くよく仕つかへたことも、天下てんかを奔走ほんそうして傑出けつしゆつした人物じんぶつには千里せんりを遠とほしとせず往むかいて訪たづね、尊王そんわうの大義たいぎを説といたこともまた三條大橋さんじやうたいはしに土下座どげざして草莽そうまうの臣高山彦九郎せんとくたかみやまひこくわと名乗なをり、泣ないて皇居くわうきよを拜まがしたことなどみんな識しつて居たのだ、それがかうして相逢ふくわうふ仲なとなつて嬉しい。大おほに飲のまう、そして大おほに志こころざしを論ろんじよう。書を讀よんだ讀よまないは第二だいにの問題もんだいだ、根本こんぽん第一だいには志こころざしだ。志こころざしあつてこそ書しよを讀よむんだ。志こころざしの無い奴やつが讀書どくしよした處ところで何なにになる、害がいはあつても益えきにはならない。志こころざしが無なくて讀書どくしよした奴やつは腐儒ふじゆにしかならない。志こころざしだ、志こころざしだ。